

手賀沼通信(第327号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は投稿いただいた2つのエッセイです。

北村さんは一橋大学経済学部関ゼミの後輩で、関ゼミ卒業生の会の恒友会の会長を務めています。

また手賀沼通信を最初から恒友会のホームページに掲載してくださっています。私がホームページを作る際にも色々アドバイスをいただきました。

北村さんは長野県小諸市出身で、投稿いただいた文章は上田郷友会で報告されたものです。

特別寄稿

橘曙覧「独楽吟」

北村尚巳

『たのしみは 朝おきいでて 昨日まで 無かりし
花の 咲ける見る時』

この歌を詠んだのは、江戸時代末期の福井藩の清廉の歌人橘曙覧。『独楽吟』中の一首。平成6年に、天皇皇后両陛下が訪米された際、当時のクリントン大統領が歓迎スピーチの締めくくりにこ

この歌を引用して、「日米両国民の友好の心の中に、一日一日新たな日とともに、確実に新しい花が咲くことを期待する」と述べたと言われる。

『独楽吟』は「たのしみは」で始まる52首からなる歌で、元治元年(1864)53歳のころの作品。極貧ながらも、

日常の些細な出来事に楽しみを求め、その喜びを感動的に詠み上げている。明治になってからは正岡子規に絶賛され、斎藤茂吉などにも多大な影響を与えた。

なぜクリントン大統領の周辺に独楽吟が伝わっていたのか。「千の風になって」を作曲した新井満氏が作家・上坂紀夫氏のリサーチの成果としてえ

るところでは、ドナルド・キーン氏が編纂した『日本文学選集』の中に独楽吟の8首が英訳付で紹介されていた。ホワイトハウスのスタッフの一人がこの歌に注目、クリントン大統領も共感して取り上げられたという。

橘曙覧は国学者にして歌人である。正岡子規は「万葉を学んで万葉を脱し、歌想豊富なるは単調なる万葉の及ぶ所にあらず」・・・と絶賛された曙覧であったが、その本領は国学にあり、本居宣長の学風を慕って国学を志した。

「定職と定収入のない曙覧に、お金や物はなかったが、時間だけはありあまるほどあった。(中略)曙覧は好きな時に好きなことをして生きた」と新井氏は記している。

福井藩主の松平春嶽は元治二年、曙覧に「古典を教える師として余に仕えてくれないか」と求めた。だが曙覧は「花めきてしばし見ゆるもすずな園たぶせのいほに咲けばなりけり」と詠み、辞退した。すずな(大根)の花が美しく見るとしたら、ただの畑に咲いているからだ、という意味だ。これに対する春嶽の返歌は「すずな園 田いおぶせの庵にさく花を しいてはをらじ さもあらばあれ」。曙覧は「藁屋」と名付けた庵住まいから抜け出すことはなかった。

- ・たのしみは 妻子めこむつまじく うちつどひ 頭かしらならべて 物をくふ時
- ・たのしみは あき米櫃こめびつに 米いでき 今一月は よしといふとき
- ・たのしみは まれに魚に煮て 児等こら皆が うまいうましと いひて食ふ時
- ・たのしみは 銭ぜになくなりて わびをるに 人の来たりて 銭くれし時
- ・たのしみは 昼寝ひるねせしまに 庭にはぬらし ふりたる雨を さめてしる時
- ・たのしみは とぼしきままに 人集あつめ酒飲め物を



『独楽吟』
橘曙覧(1812-1868)

食へといふ時

- ・たのしみは 戎夷よろこぶ 世の中に 皇国忘れぬ 人を見るとき（尊皇攘夷思想）
- ・たのしみは 鈴屋大人の 後に生まれ その御諭しを うくる思ふ時（鈴屋大人＝本居宣長のこと）

彼は国学者でもあり熱烈な愛国者で、幕末期においては尊皇攘夷思想に共鳴していたようです。というわけで、その歌には上掲の他に次のようなものも残されています。

- ・国汚す 奴 あらばと太刀抜て 仇にもあらぬ壁に物いふ
- ・日本の太刀に比べて謂ふべしや戎夷が腰に着くるなまうち（なまうち…半端に打たれたなまくら刀）
- ・はむかひし蝦夷も御稜威かしこみてなびきまつらむ草薙のたち（御稜威…天皇の威光）

福井市橘曙覧記念文学館



福井市生まれの歌人で国学者の橘曙覧の顕彰を主たる目的として開かれた施設。曙覧が隠棲

した「黄金舎」および松平春嶽命名の料亭「五嶽楼」跡地に2000年4月開館した。

文学館オープンを機に「子孫会」が開かれ、私の家内が橘曙覧の玄孫に当たるので、私も一緒に参加した。今年5月に第5回子孫会が開催され参加する。

記念文学館は、福井市の中心部にある足羽山に上る愛宕坂にあり、記念文学館を訪れた折に足羽山にも登ってみた。標高116.4mの足羽山には福井の礎を築いた継体天皇像や、十数基にもおよぶ古墳群、愛宕坂にある橘曙覧記念文学館、愛宕坂茶道美術館、自然史博物館などがある。

継体天皇とは？福井（越前）との関係は？ など興味をもった。

継体天皇とは？

継体天皇は、前代の武烈天皇など実在が疑われる人物とは違い、実在が間違いないとされる天皇



である。これ以降の天皇の系譜では、実在性が疑われる人物がおらず、継体天皇からほぼ間違いなく現在の皇室まで繋がっているとされている。（出典：ウィキペディア）

淀川水系を根拠地とした謎の大王

日本書紀によれば継体天皇は第26代の天皇で諱（いみな）を男大迹王（おほどのおおきみ）といい彦主人王（ひこうしおう）と振媛（ふるひめ）との間に生まれた。近江国高島郡三尾野（現在の滋賀県高島市あたり）を本拠にした地方豪族であった父が亡くなると母の故郷である越前国高向（たかむく）（現在の福井県坂井市丸岡町あたり）で育てられ、長じて5世紀末の越前地方を統治していた。

507年に崩御した武烈天皇に跡継ぎがいなかったため、大伴金村（おおとものかなむら）らが協議し、まずは丹波国にいた仲哀天皇から5代目の子孫である倭彦王（やまとひこおおきみ）を拔擢。しかし倭彦王は迎えの兵士を見て、自分を討伐にやってきたと勘違いし、姿をくらましてしまった。そこで次に、越前にいた応神天皇から5代目の子孫にあたる男大迹王を推挙した。最初は男大迹王も金村らに対して疑いをもっていたため、河内馬飼首荒籠（かわちのうまかいのおびとあらこ）に使いを出して確かめたところ本意だということが分かり、即位を決意した。

河内国交野郡にあった樟葉宮（くずはのみや：大阪府枚方市楠葉丘の交野天神社付近が伝承地）で天皇に即位するが、この時、男大迹王はすでに57歳だった。さらに金村の助言により、仁賢天皇の皇女で武烈天皇の妹である手白香皇女（たしろかのひめみこ）を皇后にする。

継体天皇6年（512）、朝鮮半島の高句麗や百済の勢力が伸び、神功皇后の新羅征討によって得た任那4県に対して、百済の割譲要求を飲まざるを得なかった。継体天皇21年（527）、筑紫国造磐井（つくしのくにのみやつこいわい）の乱が

勃発。磐井は朝鮮半島との交易を通じて勢力を広め、新羅に兵を送ろうとする朝廷に対して進路を妨害しようとしたが、継体天皇の命を受けた金村が物部麁鹿火（もののべのあらかい）を九州に派遣しこれを制圧した。

継体天皇は樟葉宮での即位後、山城国筒城宮（つづきのみや）、弟国宮（おとくにのみや）を経て20年後にして大和の磐余玉穗宮（いわれのたまほのみや）に遷り、ようやく大和入りを果たした。しかし、その5年後、82歳で崩御。日本書紀には三島藍野陵（みしまあいののみささぎ：大阪府茨木市大田茶臼山古墳）に葬られたとされる。

謎の大王と呼ばれるわけ

古墳時代を語るとき、継体天皇が大和王権の中核である磐余玉穗宮へ遷るのに20年を要したことや継体天皇崩御後の王位継承が混沌としていることなど不明な点も多々あるが、継体天皇が謎の大王と呼ばれる最大の理由は、応神天皇から5代目の子孫とされている点である。5世代も離れると疎遠すぎて王統の継承性が疑われ、全く新しい王統といっても差し支えないとする説も多い。別の言い方をすると、今上天皇まで連綿として続いてきたとされる皇統は、実は継体天皇から発しているかもしれないということである。

継体天皇期の6世紀は前後の5世紀・7世紀と異なり、当時の日本の歴史を読み解く根拠となっている中国の『宋書』『隋書』に倭国伝の記載がなく文献史学上空白の時期であるといわれ、様々な想像が膨らみ古墳時代の歴史に一層のロマンを駆り立てられる要因にもなっているようである。（出典：なにわ大坂をつくった100人・第14話）

記紀によれば、応神天皇5世の来孫であり、『日本書紀』の記事では越前国、『古事記』の記事では近江国を治めていた。また、『日本書紀』はこれに加えて継体を垂仁天皇の女系の8世の子孫（雲孫）とも記している。

本来は皇位を継ぐ立場ではなかったが、四従兄弟にあたる第25代武烈天皇が後嗣を残さずして崩御したため、大伴金村や物部麁鹿火などの推戴を受けて即位したとしている。先帝とは4親等以上離れている。太平洋戦争後、応神天皇5世というその特異な出自が議論の対象になった。ヤマト王権とは無関係な地方豪族が実力で大王位を篡奪し、現皇室にまで連なる新王朝を創始したとする

王朝交替説と、それ以前の大王家と血縁関係のある傍系の王族（皇族）の出身であるという『記紀』の記述を支持する説があり、それまでの大王家との血縁関係については現在も議論がある

特別寄稿

エーデルワイス サウンドオブミュージック と私のミュージカルの時代（私の懐かしい歌 7） 新田自然

先日NHKBSで映画「サウンドオブミュージック」を見た。3時間にも及ぶ大作で、少しだけ見ようと思ったのだが、つい最後まで付き合ってしまった。もう何度も見た映画であったが、ここ10年以上見てなかったもので、つい懐かしくなって見てしまったのだ。

1950年代から60年代にかけてミュージカル映画を見る楽しみが倍加した。それまでもミュージカル映画はあったのだが、カラー作品、シネマスコープ、ビスタビジョンなど、画面もスクリーンも大型化し鮮明となり、録音技術・映画館の音響設備もハイファイ化や立体音響化し、ダンスシーンなども画面からはみ出すほどに躍動して、ストーリーもドラマチックになって、ミュージカルの面白さが堪能できるようになった。

私のミュージカル映画は「雨に唄えば」（1952）に始まり「オペラ座の怪人」（2004）で終わるのだが、そのうちの多くは50年から60年代の作品が多い。「サウンドオブミュージック」は1965年につくられた映画だからミュージカルの最盛期に作られた作品である。思い出すままに作品名を挙げてみると「バンドワゴン」「ホワイトクリスマス」「オクラホマ」「回転木馬」「王様と私」「南太平洋」「ブルーハワイ」「ウェストサイド物語」「マイフェアレディ」「エビータ」などがある。

「サウンドオブミュージック」は私の最もフェイバリットな作品で、世界的に大ヒットし、アカデミー賞にも輝いた、当時の興行収入で「風と共に去りぬ」を抜いたと言われた。先日新聞を見ていたら、これまでのアカデミー賞作品のなかで、この作品が読者投票の最も好ましい作品だとあるのを見て、ちょうどこの稿を書いていたので意を

強くした。

主題歌のひとつ「ド・レ・ミの歌」はアルプスやザルツブルク市街を背景に、子供たちに唄う喜びを教えるシーンで、ジュリー・アンドリュースの声がアルプスに響き渡る素晴らしい歌であった。いまだにこのシーンをたどるツアーがあるという。わが国ではペギー葉山の訳詞による歌が大ヒットした。ペギー葉山はこのミュージカルをブロードウェイで観て直ちに自ら訳詞、1962年に発売した。このミュージカルの映画化は1965年であるから国内封切りの前に歌が流行っていたことになる。ペギー葉山の詞は必ずしも訳詞とは言えないところもあるが、これでまかり通っているのが面白い。じつは私もこの歌を毎朝唄っているのだということに気づいた。このところ高齢のせいか、喉の機能が劣化し声が十分出なくなり、機能保全のため毎朝のウォーキングで大声で歌を唄っているが、最初に発声練習のため、ドレミの歌の後半部分「ソ・ド・ラ・ファ・ミ・ド・レ ソ・ド・ラ・シ・ド・レ・ド」を唄うことにしている。

ここで取り上げる劇中歌の「エーデルワイス」は、バラード調で、オーストリアの古くからの民謡と思っていたが、そうではないと後になってから知った。アルプスに咲くウスユキ草になぞらえた愛国歌である。

修道院から派遣されたアンはトラップ一家の家庭教師となり、子供たちと親しくなって、トラップ大佐と結婚する。オーストリアはドイツに併合され、愛国者であった一家は亡命を決意する。エーデルワイスの歌は、劇中のクライマックスに唄われて感動を呼ぶシーンを彩った。この後一家はナチに追われながら、アルプスを越え、スイス経由でアメリカに渡り家族合唱団を結成し成功を収めることになる。すべての曲が素晴らしく、ドラマチックな構成で、サスペンスもあるという、成功条件のそろった作品である。

Edelweiss, edelweiss
every morning you greet me
Small and white clean and bright
you look happy to meet me

エーデルワイスはオーストリアの国花であり、愛国のシンボルとして、音楽祭で歌われるところ

が素晴らしい。すべての歌が素晴らしく、この作品は作曲リチャード・ロジャース、作詞オスカー・ハマーシュタイン二世の集大成のミュージカルとなった。

私にとって最後のミュージカルは「オペラ座の怪人」であると書いた。アンドリュー・ロイド・ウェバーの一連のミュージカルの最盛期の作品である。主演を演じたサラ・ブライトマンは3オクターブの声が出せるスターとして主題歌を見事に歌い上げた。余談だがNHKテレビドラマ「坂の上の雲」の主題曲も歌っている。

思い出を辿ると、ニューヨークに出張したある夜、ブロードウェイの劇場に足を運んだ。初めて見たブロードウェイミュージカルは迫力があつた。しかしその夜の記憶は夜のマンハッタンの通りを、一人でホテルまで歩いて帰る緊張感の方が強かつた。

最近のミュージカル映画はアニメが多いようで、私は全く観ていない。それは私の年齢のせいかもしれない。いやそもそも映画なるものから遠ざかっているようだ、観るとすればBSで古いものばかり、悲しいことだが好奇心と感受性がなくなって、かろうじて古いものだけなら入れるのだ。それは懐かしみであって、老人が過去の話ばかりするのによく似ている。

「サウンドオブミュージック」について書こうとして、思うままに書き進んできたなら、こんなところまで来てしまった。最後にそれらのシーンを思い出しながら終わることとする。

私の若いころのジーン・ケリーよ、ビング・クロスビーよ、ダニー・ケイよ、エルビス・プレスビーよ、ジョージ・チャキリスよ、お前たちはどこへ行ってしまったのか。